

Title	Existential and Possessive Constructions : Complex Predicates and Argument Realization
Author(s)	伊藤, 千鶴
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59388">https://hdl.handle.net/11094/59388</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 【6】

氏名	伊藤千鶴
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第24916号
学位授与年月日	平成23年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	Existential and Possessive Constructions: Complex Predicates and Argument Realization (存在・所有構文：複合動詞と項実現)
論文審査委員	(主査) 教授 大庭 幸男 (副査) 教授 岡田 禎之 教授 加藤 正治 教授 神山 孝夫

## 論文内容の要旨

本論文では、複合述語を含む節における項の実現パターンについて議論を行い、節内のどの意味特性が統語構造の投射にどのように関わっているのかについて示しながら、節構造と項実現の関係性を明らかにしていく。全体は6章からなり、総頁数は英文にてA4判233頁(400字詰め原稿用紙に換算して約700枚に相当する)である。

第1章では、本論文で取り扱う現象の項実現や項交替の特異性を指摘し、それに対する解決方法の概略を示す。

第2章では、ある特定の他動詞がアスペクト形式「ている」と結合した際に、格交替が見られる現象について議論する。これまでの理論言語学において、「ている」形式が格標示や項実現に関連があるという視察はなかった。しかしながら、本論文では、所有変化を示す動詞を補部にとる場合、主格—対格交替がおこるという事実を指摘し、主格 Theme 項を伴う「ている」形式の文(これを「擬似存在構文」と名付ける)の統語的・意味的特性を明らかにする。また、他の格交替のある構文や規範的なアスペクト構文と比較しながら、擬似存在構文にのみ項実現の阻止があることや例外的な場所格を許容することや補部に生起できる動詞に対してアスペクト制限があることを示す。

第3章では、擬似存在構文における動詞「いる」は単なるアスペクト標示を行う助動詞ではなく、意味内容をもつ完全動詞としての機能も保持していると提案し、理論の構築を行う。本章では、動詞「いる」の語彙的な特性を認めた上で、擬似存在構文は、統語的には他動詞＋存在動詞という複合動詞を形成していると主張し、この構文における項実現の阻止は他動詞－非対格複合動詞の一般特性として導かれることを提案する。また、擬似存在構文における他動詞と「いる」のアスペクト関係は、複合動詞における主動詞と補部動詞のアスペクトの関係と一致することを示すことで、複合動詞分析の補強を図る。さらに、存在動詞分析によって、例外的に見える場所格の容認性についても統一的な説明が可能となることを示す。

第4章では、Applicative 理論に基づき、存在・所有の交替現象の新しいモデルを提案する。特に、所有構文の定性効果に注目し、英語の There 構文や Have 構文のように、汎言語的に見ても、存在特性と定性効果は密接に関連していることを示すことによって、所有構文における動詞「いる」は存在動詞であり、Applicative によって Possessor 項が導入され、所有の意味が付与されると主張する。

第5章では、英語と日本語の所有変化動詞における項実現について議論する。まず、所有変化動詞は、どのような形式（英語の二重目的語構文と与格構文、あるいは日本語の対格－与格構文と与格－対格構文）においても所有変化の意味しかもたないことを示し、関連する所有の意味は動詞によってではなく、名詞句内で導入されると提案する。

第6章では議論全体の総括を行う。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、ある特定の他動詞と「ている」形式を伴う構文、「存在」と「所有」を表す「いる」構文、所有関係を表す二重目的語構文や与格構文を取り上げ、格の交替、アスペクト制限、項実現、定性効果などの観点からこれらの構文の統語的・意味的特性を説明しようと試みたものである。

本論文の意義は、①もっぱらアスペクトを表すものと考えられてきた日本語の「ている」形式が、「売る」を代表とするいくつかの動詞と結合するとき一種の所有を表すという、これまで議論されたことのない事実を指摘し、この種の構文（これを擬似存在文と言う）に関わる格表示、統語的・意味的特徴などを詳細に記述したこと、②加えて、項統合という新たな手法を用いることにより、この擬似存在文がもつ特異性について合理的な結論を導き出したこと、③「所有」を表す「いる」構文について、バンツー語族などに見られる Applicative 理論を援用することによって、この構文の構造を提案し、それを用いて統語的・意味的特徴を捉えるとともに、「存在」を表す「いる」構文との統語的な振る舞いの違いをも包括的に説明していること、④英語と日本語の二重目的語構文と与格構文に見られる所有関係を、Applicative 理論を用いることによって、これらの構文の特性を導き出したこと、などにある。さらに、上記については、随所に独創的な分析や提案がなされており、高く評価できる。

しかし、本論文には問題がないわけではない。たとえば、①擬似存在構文の主語が **pro** であることを主張するために、英語のイディオムの一部を用いて繰り上げ構造と制御構造とを区別する方法を適用しているが、その方法には **PRO** との関係で別の問題が生じる可能性があること、②擬似存在構文に生起できる述語のタイプに制限があること、また一部の述語が否定環境にのみ生起することなど、この構文に見られる共起制限が十分に解明されていないこと、③引用した例のうち、ロシア語、スペイン語の例についての調査がやや不十分であること、などがあげられる。これらに関しては、更なる検討が必要であろう。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。